

「完全なる人間」を育むために —ルネサンス初期のイタリア人文主義者の音楽教育観—

石 田 陽 子

(平成18年 8 月21日受理 最終原稿平成18年 9 月20日受理)

ルネサンス期イタリアの人文主義者であり教育者であったヴィットリーノ・ダ・フェルトレが15世紀前半にマントヴァに創設した学校での教育に関する記録と、彼の学校創設より少し前に、同じくイタリアの人文主義者ヴェルジェーリオが著わした教育論を手がかりとして、人文主義者の音楽教育観の検証を試みている。ヴィットリーノの学校では、「学問としての音楽」と「実践としての音楽」がカリキュラムに組み込まれていたと考えられるが、ヴェルジェーリオの論文でも、両方の音楽の有効性について言及されている。「学問としての音楽」は自由学科の一科目としての音楽という中世以来の伝統を踏襲している一方で、「実践としての音楽」は、その教育的効果の根拠としてギリシャのエートス論を援用しつつ、精神を正しく導くという道徳的視点から評価している。

教育によって「完全なる人間」をめざすという人文主義者の教育理念は、ルネサンスの理想である「完全性の希求」と呼応するものであり、音楽も理想の人間をつくりあげるための必須科目として軽視されてはいなかったと言える。

キーワード：人文主義者、学問としての音楽 (*musica speculativa*)

実践としての音楽 (*musica practica*)、エートス論、完全性の希求

はじめに

ルネサンス音楽を研究するにあたっては、当時の思潮である人文主義との繋がりを等閑に付すことはできない(註1)。人文主義の最も重要な側面が「古典研究」であるならば、音楽におけるそれは15世紀後半から顕著になってくる。つまり、ビザンティウムから西ヨーロッパにもたらされたアリスティーデース・クィンティリアヌス(Aristides Quintilianus 紀元前4世紀)、クラウディオス・プトレマイオス(Klaudios Ptolemaios 紀元後2世紀)などの音楽理論書をはじめ、アリストテレス(Aristoteles B.C.384-322)の『政治学』第8巻やプラトン(Platon B.C.427-347)の『対話篇』など音楽に関する記述が含まれる著作が15世紀末までにラテン語に翻訳されている。その影響は、当時の音楽理論家の著作の、旋法、音程、比率、音楽の調和などに関する考え方に見てとれる(註2)。また、音楽や文学を含む広範な古典研究は約1世紀を経て「オペラの誕生」という西洋音楽史上画期的な成果として結実する。

しかし、人文主義の音楽への影響は、音楽家の理論研究やそれに基づく実践の領域、あるいはオペラや声楽曲における主題の選択やことばと音楽の関係に見られるような人文主義的研究

石 田 陽 子

と音楽家の共同作業としての所産など、いわば理論家や作曲家など音楽の専門家が扱う領域だけにとどまるものではない。

人文主義と音楽との思いがけない繋がりに気づかされたのは、15世紀初期に当時の人文主義者ヴィットリーノ・ダ・フェルトレ (Vittorino da Feltre 1378-1446/7) が、時のマントヴァ侯の要請を受け、侯の子弟を教育するべく創設した学校に関する資料である (註3)。その資料とは、ヴィットリーノが雇っていた教師が記録されているもので、文法学者をはじめ、弁証家、算数学者、筆者家、画家、馬術家、舞踏家、音楽家、歌手、即興歌人など様々な分野にわたる教師が挙げられているが、この記録が音楽との関連で重要と思われるのは以下の理由からである。

まず、大学や大聖堂付属の学校以外でも音楽教育が行なわれていた可能性を示唆している点である。次に、音楽に関わる教師として、音楽家 (musici)、歌手 (cantores)、即興歌人 (citharaedi) を雇っていたことである。当時の習慣から見て、音楽家というのは知識としての音楽を教える教師を指し、歌手や即興歌人は、歌唱や即興演奏など音楽の実践に関わる分野を担当していたと考えられる。すなわち、中世には、学識ある人間になるために学ぶべきとされた自由七科のうち、音楽は幾何、算数、天文学とともに数学的な四科に分類されていたように、数の学問という認識が一般的であり、「音楽は理性と感覚によって音の響きの多様な高低関係を調べる学科である」としたボエティウス (Anicius Manlius Severinus Boethius ca.480-524) のことばからも明らかなように知識の対象と考えられていた (註4)。その伝統はルネサンス時代にも受け継がれ、当時の大学のカリキュラムにも組み込まれていたが、ヴィットリーノの学校では、中世以来の伝統である思弁的な科目としての音楽とともに、歌唱や器楽など実践としての音楽の授業が並行して行なわれていたのだろうか。もしそうであれば、この学校での教育は、ルネサンス期の音楽教育を包括的に考察する場合の貴重な事例となるだろう。

拙論では、ヴィットリーノが創設した学校に関する史料と併せて、同時代に著わされたいくつかの人文主義的教育論のうち、その先駆けであるとともに現存する写本や印刷本の数からみて最も広く読まれたと考えられ、さらにヴィットリーノと直接的な繋がりがあったと思われるピエル・パオロ・ヴェルジェーリオ (Pier Paolo Vergerio ca.1368-1444) の教育論における音楽に関する記述を視野に含め、ルネサンス初期の人文主義教育者の音楽教育観について検証するものである。

I ヴィットリーノ・ダ・フェルトレと「楽しい家 (Casa Giocosa)」における教育

1. ヴィットリーノ・ダ・フェルトレとその時代

ヴィットリーノが生きた時代は、イタリア人文主義の歴史において、人文研究、いわゆる「フマニタス研究」が学校教育に定着する時期でもあるので、時代背景とあわせて、ヴィットリーノの生涯を概観しておきたい。

ヴィットリーノは、1378年ヴェネツィアに近い都市トレヴィーゾ近郊のフェルトレという町

「完全なる人間」を育むために

のランバルド・ニ家に公証人の息子として生まれ、1390年代から1415年までをパドヴァで過ごしている（註5）。当時のパドヴァはカッラーラ家の支配下にあったが、当主フランチェスコがイタリア人文主義の先駆であったペトラルカ（Francesco Petrarca 1304-1374）と親交が深かったと同時に、パドヴァが地理的に、ギリシャへの関心が伝統的に強かったヴェネツィアに近いこともあり、パドヴァ大学では、神学や弁証法のような学科でさえ中世のスコラ学的方法論から脱却し、新たな方法論に基づく研究が行なわれていたとされる（註6）。

コンスタンティノーブルからフィレンツェに招かれたマヌエル・クリュソロラス（Manuel Chrysoloras 1350-1415）によって西ヨーロッパでギリシャ語研究が復活したのが1395年のことで、ヴィットリーノがパドヴァで学び始めたのは、ちょうどイタリアでの人文主義が成熟期を迎えつつある時期でもあった。

1395年、18歳でパドヴァ大学に入学し、まず最初に文法とラテン語文学の講義を受講したがすぐに才能を認められ文法の基礎を教える「magister puerorum」の身分を得た（註7）。この仕事の傍ら、引き続き、大学で弁証法、哲学、修辞学、教会法などを学び、1410年に学位を取得した。さらに、当時最も有能な人物とされたピアジョ・ペラカーニ（Biagio Pelacani da Parma ?-1416）の家で使用人として働きながら私的にユークリッド幾何学も習得している。1407年以来、パドヴァ大学では、当時最もすぐれたラテン語学者ガスパリーノ・バルジッツァ（Gasparino Barzizza ca.1360- ca.1431）が教授の地位にあったが、古典研究の復活においてキケロの伝統が確立したのは彼の功績と言われている。ヴィットリーノも、1415年にヴェネツィアに移るまでの間、彼の教えを受けたと思われるが、バルジッツァの死後、ヴィットリーノはキケロおよびラテン語研究において最もすぐれた後継者と言われるほどの学識を身につけた。

ヴィットリーノがヴェネツィアに移ったのは、グアリーノ・ダ・ヴェローナ（Guarino da Verona 1374-1460）が1414年にヴェネツィア最初の人文主義教育のために設立した学校で教鞭をとるためである。グアリーノは1403〜08年にかけて、コンスタンティノーブルでクリュソロラス家に滞在してギリシャ語を学び、そこでバルジッツァとも親しい関係にあり、当時としては、ギリシャ語を読み書きできる数少ないイタリア生まれの人文主義者だった。グアリーノがバルジッツァをパドヴァ大学に訪ねた折りにヴィットリーノとの繋がりができたと思われる。ヴェネツィアでのヴィットリーノはグアリーノやクレタ島出身の学者で当時ヴェネツィアにいたトレヴィゾント（Georgios Trapezuntios 1395?-1484）からギリシャ語を、トレヴィゾントはヴィットリーノからラテン語を相互に学んでいる。

しかし、翌年（1416年）には疫病流行のため、二人はパドヴァに避難し学校は閉鎖された。ヴィットリーノは私的な教師として、そのままパドヴァに留まり、翌'20年にパドヴァ大学に職を得た。この頃にはラテン語や数学研究の第一人者としての名声を確立しており、'21年からは、バルジッツァの後任として修辞学教授のポストを受け継ぐとともに、自宅では、生徒と起居をともにしながら教育をおこなう一種の寄宿学校を開いていたが、翌'22年には再び、東方からのギリシャ語文献の入手が容易なヴェネツィアに移り自らが主催する学校を開いた。ところが、従兄がヴェネツィア政府から追放を命じられる出来事があり、ヴィットリーノ自身

石 田 陽 子

もこの地に留まることが難しい状況に置かれた。折しも、当時のマントヴァ侯ジャンフランチェスコ・ゴンザーガ（Gianfrancesco Gonzaga 1395-1444）から、侯の子供たちのための学校設立の要請があり、それを受け入れることになる（註8）。

マントヴァのような都市国家に限ったことではないが、君主にとって自らの挙措振る舞いは無論のこと、宮殿や教会の建設や、高名な画家や音楽家、学者の保護などはすべて自身の威信表示としての重要な行為であり、それらを通して獲得される名声は君主を君主たらしめる絶対不可欠の属性であった。ルネサンス時代には、人文主義者を雇うことも同様の意味を持ち、加えて、教育の重要性に対する認識の高まりが背景にあった。ゴンザーガ家に限らず、ミラノのヴィスコンティ家はクリュソロラスやバルジツァを雇い、少し遅れて、フェッラーラのエステ家がグアリーノを雇ったのも事情は同じである。

1423年、マントヴァに着任したヴィットリーノは、その後、1446年に亡くなるまでゴンザーガ家に仕え人文主義的教育に後半生を捧げることになる。彼の設立した学校は「カーザ・ジョコーザ」と命名され、ルネサンス初期の、とりわけすぐれた学校として、イタリア各地の君主や人文主義者の多くが自らの子弟を入学させるほどの名声を確立した。

ちなみに、ヴィットリーノの人文主義者あるいは教育者としての基盤はパドヴァ時代に形成されたと言えるが、15世紀初期は、ヴィットリーノのみならず多くの人文主義的教育家に影響を与えた、グアリーノによるラテン語訳プルタルコス『教育論』が出版され（1411年）、またクインティリアヌスの『雄弁家教育論（De Institutio Oratore）』の完全なテキストがボッジョ（Poggio Bracciolini）によって発見（1410年代）されている。この論文の断片は以前から伝えられており、バルジツァはパドヴァ大学での授業のテキストとして使っていたと言われているためヴィットリーノも知っていた可能性が高い。さらには、キケロの『雄弁術（De Oratore）』の発見も手伝って、以後の古典研究熱は一層高まっていく時期でもあった。こうした時期に、最も先進的な学問研究に携わるなかでヴィットリーノの教育理念が形成されていったと言える。次に、ヴィットリーノが設立した学校の沿革やカリキュラムについて検証する。

2. 「カーザ・ジョコーザ」とヴィットリーノの教育法

マントヴァ侯は宮殿近くの別荘を学校として使用することを許可した（註9）。この建物は1388～89年に、当時のマントヴァ侯フランチェスコ1世（Francesco I Gonzaga）が建てたもので、「La Gioiosa（陽気な家）の意」と呼ばれていた。ヴィットリーノは「Gioiosa」を「gioia（喜び）」から派生した語「Giocosa（楽しい）」に変えた。「giocosa」はヴェネト地方の方言では「jocus」となるが、この語はラテン語の「ludus（遊戯、気晴らし）などの意」と同じ意味を持ち、しかも「楽しい」「心地よい」という意味を残しながらローマ時代には「学校」を意味する一般的名称をも連想させたからだという。こうした命名の経緯からも、学校が「楽しい家」であるとする「Giocosa」という語に込められたヴィットリーノの教育観が読み取れるが、彼の理想は学校の立地条件にも現われている（註10）。「La Giocosa」があったとされる場所を示す地図によれば、学校は宮殿に付属する牧草地に面している。「遊び場となる

「完全なる人間」を育むために

緑に包まれたオープンスペースや広い並木道を持つ環境は、それまでの中世の学校が持つイメージを一掃する画期的なものであった」とする記述に誇張はないだろう (Woodward 1970:32)。

ヴィットリーノは、マントヴァ侯の子供たちを含めて全生徒を直接監督し、全員が同じ環境で生活をともしよう主張し寄宿学校としての形態を確立した。設立当時マントヴァ侯には11歳～4歳までの四人の子ども（長子ルドヴィーコ (Ludovico 1412-1482)、次男カルロ (Carlo 1417-1467?)、長女マルゲリータ (Margherita 1418-1439)、三男ジャンルチード (Gianlucido 1423-1448) がいて、後には、次女チェチーリア (Cecilia 1426-1451) と四男アレッサンドロ (Alessandro 1427-1466) も学んでいる。なかでも、チェチーリアは後に、ルネサンスを代表する学識ある女性のひとりに数えられるほどに学問を身につけた。

生徒として4歳から20歳くらいまでの子弟が学び、約1～10年間教えを受けたが、12～14歳で入学し4～6年間学ぶのが一般的であったという (Grendler 1989:130)。生徒数は最も多いときで約70名を数え、そのうち少なくとも3名の女子生徒が記録されているが、二人は上記のゴンザーガ家の娘で、もう一人は長子ルドヴィーコの婚約者として12歳でマントヴァにきたバルバラ・フォン・ブランデンブルク (Barbara von Brandenburg 1422-1481) である。生徒たちは、将来の君主、聖職者あるいは人文主義者や教師になるはずであった。例えば、後のウルビーノ公フェデリーゴⅡ・ダ・モンテフェルトロ (Federigo II da Montefeltro 1422-1482) は1434年から'36年までヴィットリーノのもとで学んでいる。他にも、イーモラの統治者となるタッデーオ・デマンフレディ (Taddeo de'Manfredi)、大司教でリウィウスの注釈者となるジョヴァンニ・アンドレア・デブッシ (Giovanni Andrea de'Bussi) や、サッスウォーロ (Sassuolo) やロレンツォ・ヴァッラ (Lorenzo Valla 1407-1457) など後年には優秀な人文主義者として名声を獲得する人材を輩出することになる。また、パドヴァ時代から繋がりがあったグアリーノも自身の息子のひとりグレゴリオを入学させている。

では、学校が「カーザ・ジョコーザ」であるためにヴィットリーノが実践した教育とはどのようなものだったのだろうか。

まず、教育の基本に文学を据え、ラテン語の文法、読解や作文教育に重点を置き、キケロの『De Oratore』やヴェルギリウス、オウィディウスなどがテキストとして選ばれた。また、歴史と哲学、とりわけ生きる技術の指針として倫理学を重視し、古典の音読や朗読は毎日反復練習された。あらゆる年齢の生徒に対して注意を促したのは、話ぶりだった。口を正しく開き、息を正確な間隔で吸い、ことばの各シラブルを明瞭に声にすること。歯擦音や喉頭音での発音は避ける必要性を主張した。音読や会話の際の声の大きさ、適切な強調とイントネーションへの注意、アクセントなどへの注意を促している。古典授業での音読は、歴史家や詩人を知的理解する一助としての役割と、その理解度を試す役割を担っていた。「この方法はクリュソロラスに拠るもので、グアリーノも高く評価していた」とされる (Woodward 1970:58)。朗読法も雄弁術の有益な訓練として教えられた。音読や朗読は非常に健康的な訓練とされ、その意味では知的訓練であると同時に、身体の訓練という意味あいも兼ねていたと言えよう。こうした訓練のテキストとして、幼少の生徒には宗教的な教材が与えられ、次いで、オウィディウスや

石 田 陽 子

ウェルギリウスの短く簡単なパッセージが反復練習された。10歳までに、自作のラテン語作文を読める生徒もあり、また、14歳以下でも男女を問わず、キケロの完全な演説などを正確に暗誦できたという。こうした訓練を通して、生徒たちは豊富な語彙や統語法や表現法を貯え、自らの文章力を高めることができた。ヴィットリーノはラテン語を教育の当然の手段とみなしていたが、カリキュラムを言語のみに限定したわけではない。

歴史のテキストとしてリウィウスを採りあげ、プリニウスの『博物誌』も採用された。ギリシャ語もラテン語と同等に重視され、予備段階として文法の課程を終えると、上級者のテキストとしてクセノフォン、ヘロドトス、プラトン、アリストテレスなどの著作が読まれたと考えられる(註11)。ヴィットリーノは、これで文学学習の完成とみなしたが、文学学習の最終目標は「指導者としての人生のための最高の準備」であり、それから法学、医学、神学研究へと進むのである(Woodward 1970:59)。

この意味では、彼は自らの学校を大学での勉学の前段階とも捉えていたように思われるとともに、ギリシャ語重視の姿勢は、ルネサンス期の西ヨーロッパにギリシャ語をもたらした再初期の人々、クリュソロラス、トレビゾントや、イタリア人でギリシャに直接学んだグアリーノ等との繋がりから見て当然のことであろう。

しかし、ヴィットリーノはカリキュラムを文学のみに限定したわけではない。ブレンディアクアによれば、正確さと精神をきびきびしたものにする訓練として算数を評価しており、彼自身の経歴や学校に雇われていた教師の名称から判断して、幾何学や天文学、自然史の授業も行なわれていたと思われる。

さらに、舞踊家や馬術家が雇われていたことから示唆されるが、ヴィットリーノは、体育つまり身体の訓練も重視し、ゲームや球技もとりにれた戸外での運動を奨励した。彼の友人の記録によれば、学校から徒歩で遠出することもあったという(註12)。それは、「身体の健康が知的発達のための不可欠の条件と考えていた」からであり、学校でのカリキュラムから判断して、「ヴィットリーノの人文主義者として、また教育者としての目標は、精神と身体それに気質の調和のとれた発達を保証すること」だったと言えよう(Woodward 1970:76)。だとすればこの目標を実現するべく音楽も何らかの教育的役割を担っていたはずであり、次節では、この点について検証する。

3. ヴィットリーノの音楽教育

ところで、音楽は教育のなかにどのように位置づけられていたのだろうか。既述した通り、ヴィットリーノは音楽に関わる教師として、理論家に加えて、声楽家と即興音楽家、すなわち演奏家を雇っていた。これは、理論と実践の両方が教えられた可能性を示唆しているが、そこから読みとれる彼の音楽教育観はどのようなものだろうか。音楽に関するヴィットリーノ自身の言及はないため、ここでは彼と繋がりがあったパドヴァやマントヴァに関する資料をもとに彼をとりまく音楽事情を検証する。

まず、彼が音楽に関心を向ける契機のひとつに、彼も在籍していたパドヴァ大学の音楽的伝

「完全なる人間」を育むために

統が挙げられよう。14世紀頃のパドヴァ大学について「音楽家や弁証家、修辞学者がいたが、文法学者が最も多かった。教師が三科を教えていたし、四科も学ばれていて、数学者と天文学者、自然科学者と幾何学者も知られていた。」という記述が示唆するように、音楽は自由学科のひとつとして教えられていた (Gallico 1981:189) (註13)。また、大学と繋がりのある人によって書かれた論文も大学での音楽研究を示す証左となろう。そのひとつに、14世紀イタリア音楽（いわゆるトレチェント音楽）の代表的な作曲家マルケット・ダ・パドヴァ (Marchetto da Padova) が学問としての音楽 (musica speculativa) と実践としての音楽 (musica practica) について書いた論文があるが、これは「かなり数学研究を重ねたうえで書かれた」とされる (Carpenter 1972:42)。あるいは、トレチェント音楽の第三世代の作曲家ヨアンネス・チコニア (Johannes Ciconia ca.1340-1411/2) はパドヴァに定住し、マルケットと同様、音楽の学問的側面と実践的側面に関心を持ち包括的で思弁的論文を書いたが、論文は「チコニアが教師を務めていたパドヴァ大学における数学的学科としての音楽を強調したもの」であると指摘されている (Carpenter 1972:43)。このように理論と実践の両面を合わせもつ研究が盛んであったパドヴァ大学の伝統もヴィットリーノの音楽観の基層になったのではないだろうか。

次に、彼と音楽を繋ぐ証左となるのは、彼の生徒のひとりとされるジョヴァンニ・ガッリコ (Giovanni Gallico ca.1415-ca.1473) の論文『De ritu canendi vetustissimo et nuovo』である。このなかで、学校について「ヴィットリーノのもとでは、ギリシャ語の文学やラテン語の文学、文法や音楽が教えられている。」とあり、また、ヴィットリーノの音楽への関心について「ヴィットリーノ先生からボエティウスの音楽を聞いた」という具体的な記述が見られる (註12)。「ボエティウスの音楽」というのは、おそらく彼の著作『音楽教程 (De institutione musica)』だと思われるが、ヴィットリーノがこれをテキストとして授業をしたということを示唆しているのではないだろうか。既述したように、ボエティウスは音楽を「宇宙の音楽 (ムシカ・ムンダーナ)」、「人間の音楽 (ムシカ・フマーナ)」と「道具の音楽 (ムシカ・インストルメンタリス)」の3つに分類し、各々の秩序の原理を数的関係に求めているのは周知の事実であるが、一方で「音楽は単なる思弁ではなく道徳的なものと結びついている」ということばも残しているように、「道徳に対する音楽の影響も強調しており、この教義がプラトンに倣ってエートスの概念を要求した」とする (Gallico 1981:193)。つまり、音楽は特別な伝達力を持ち、それを聴く者の魂に何らかの影響を与えうるとすれば、音楽実践の教育的役割を積極的に評価できるという認識をヴィットリーノが持つに至ったのであり、「自らの演奏あるいは聴くことを通して生徒の情緒や行動に影響を与えうる音楽は教育の重要な手段となった」のである (Gallico 1981:193)。

ヴィットリーノのなかで、ボエティウスの教義、つまり、宇宙と人間と倫理の結びつきという原理は、プラトンの主張するエートス論とも共鳴しあったのではないかと、そして、ここにこそ、音楽実践が採り入れられたひとつの根拠が求められるのではないかとされる (Gallico 1981:193)。自由人であるための不可欠な科目として思弁的音楽の重視は中世以来の伝統であるが、ギリシャのエートス論に裏づけられた音楽実践は、教育が道徳的目的を持つべきであるとする

石 田 陽 子

人文主義的教育の理念にかなっており、歌手や即興歌人を雇う必然性も理解できよう。

また、15世紀後半のマントヴァの音楽事情に関する資料から、当時の音楽実践についての手がかりとなる事実が見てとれる。それは15世紀後半に活躍した音楽理論家ガッフリーオの理論書『Practica Musicae』（1496）に「Bonadies praeceptor meus（私の先生であるボナディエス）」と記されている作曲家が残した写本である（註14）。ガッフリーオは1474年あるいは、その前年にはマントヴァにいたことが知られている。彼が自らの師と言及しているのは、ヨハネス・ボナディエスというフランドル出身のカルメル会修道士だが、作曲家兼聖歌隊長でもあった。ルッカでヨハネス・ホスピー（Johannes Hothby）に学び、1473年にはマントヴァの修道院にいたことが写本から明らかになる。二部分からなるこの写本の、年代的により新しい部分の奥付には「マントヴァの修道院にて、修道士ボナディエス 1473年10月4日15時」と記されているが、この部分には、チコニアやカゼルタなど数名の音楽理論家の論文の転写とともに、多声の宗教曲やイタリア語の歌詞による3声の世俗歌曲が収められている（註15）。ボナディエスとカーザ・ジョコーザを繋ぐ証左はなく、また、この写本が筆写されたのはヴィットリーノの死後であり、これらの曲が学校で実践された音楽であるとは言えないが、彼が、「歌手」と「即興歌人」を区別していることを考慮するならば、多声曲が指導されていたとも考えられる。もし多声曲であれば、宗教曲とともに、写本に見られるような多声の世俗曲であった可能性は皆無ではないだろう。それは、記されたポリフォニーの学習に繋がるものであり、例えば、修道院や教会付属の聖歌隊学校で行なわれていたような訓練も採り入れられていたとも言える。

一方の「即興歌人」は、楽器伴奏による独唱、すなわち楽譜に書かれない音楽を指導していたと考えられるが、こうした歌唱スタイルは、ルネサンス期には人文主義者によってホメロスの再現という新たな意味を付与されて流行する。マントヴァの学校でも、同じ意味で「即興歌人」による音楽が実践されていたとするならば、その教育的効果とは関係があるとは言えないものの、音楽史的に興味深い仮定が提起される。それは、記されたポリフォニーと伴奏つき即興的独唱歌曲の融合とでもいうべきフロットラという声楽曲がマントヴァを中心に隆盛を見た重要な契機を、ヴィットリーノの学校の音楽実践にたどることができるのではないかという仮定である。しかも、フロットラは、主としてマントヴァとフェッラーラで流行を見たが、その中心的存在と言われるのはフェッラーラのエステ家出身で、後にマントヴァ侯妃となるイザベッラ・デステ（Isabella d'Este 1474-1539）だが、イザベッラが1490年にマントヴァに嫁してくる以前にフロットラ誕生の舞台が準備されていたことになる。しかも、ヴィットリーノの師であり同僚でもあったグアリーノの息子のひとりはマントヴァの学校で学んでおり、また、フェッラーラの学校で指導者となったのはグアリーノ末子のバティスタであることも興味深いものがある。

残された史料からは、ヴィットリーノの音楽教育にボエティウスやプラトンの著作が影響していることは疑いないだろうが、彼は自らの教育理念や教育方法に関しての著作を残していないため、学校での音楽教育については推察の域を出るものではない。従って、彼が実践した教育の背景をさらに考察するために、次章では、ヴェルジェーリオの教育論における音楽につい

「完全なる人間」を育むために

での記述を検証する。

Ⅱ ヴェルジェーリオ：『Ad Ubertinum de Carrara de Ingenuis Moribus et Liberaribus Adulescentinae Studiis Liber（ウベルティヌス・カッラーラへ、青少年のすぐれた習慣および自由学芸について）』（註16）

ヴェルジェーリオは、1368年頃カーポディストリアに生まれ、人文科学、医学、法律をパドヴァで学び、1397年からフィレンツェやボローニャで教鞭を執った。その後、1399年末にパドヴァに戻りパドヴァ大学で教えていたが、それはヴィットリーノが同大学で学んでいた時期と一致する。当時、クリュソロラスなどによれば、ヴェルジェーリオはクインティリアヌスを初めて紹介した学者として知られていた。1405年にはローマに赴き、後年、教会や神聖ローマ皇帝シジスムントに仕え、1444年ブダペストで没した（註17）。

拙稿で言及する論文は1402〜'03年頃に書かれたとされるが、ちょうど、「古典研究を熱狂的に支持したイタリアの人文主義者たちが、中世後期以来の遺産である知的訓練が不適切で反対すべきであるとし、これに代わる新しい見解を提供した時期にあたる」（Kallendorf 2002:x）。つまり、人文主義者はエリート層の支持を得るべく、いわば、新しい学問研究を売り込むために、競って教育的論文を書いたのだが、そのなかでも最初で、しかも最も重要とされるのが彼の論文であり、「エラスムスの著作以前に最も多く写本が作られ再版され」、今日でも300篇以上の写本と40種以上の印刷本が残っている（Grendler 1989:118）。

この論文は、表題から明らかなように、パドヴァのかつての統治者の第3子ウベルティーン・ダ・カッラーラ（1390-1407）に教え諭すような文体で書かれており、未来の統治者となるべき若者に向けた教育論になっている。論文全体から見れば、音楽に関する記述はごくわずかだが、音楽教育観を知る上で、全体のコンテクストの把握も重要であると思われるので、順をおって論文の内容を要約しつつ音楽に関する記述を検証する。

まず、学問を身につけさせるのが子に対する親の最も大切な義務であるとし、人間にとって富や栄光、快楽は一時的であるが、人格や徳は永続するものなので、自由学科と徳の獲得が最も望ましいとする、学問教育の必要性について述べた序文で始まり、以下各々に小タイトルを付した7章からなる。

序文に次いで、第1章「自由人にふさわしい気質」では、その気質とは徳と真の名誉への願望であり、この願望があれば若者は学問に向うとし、若者は経験不足から誤りに陥り易いので年長者の忠告に耳を傾け、過去のすぐれた人物に倣うようにと諭している。

第2章では「若者の特質」について語られる。若者にはすぐれた者もいれば悪い者もいるがすぐれた人物にはさらに成長を促し、不道徳な者や品性の悪い者は矯正されねばならないとし、すぐれた品性を陶冶すべく教育の重要性が説かれるが、理性や分別が過度の情熱に負けないように注意を促し、「人生で最も有益なことはすべてが行きすぎないこと」すなわち節制の重要性が協調されている。

石 田 陽 子

第3章は「自由学科とは何か」という見出しで、自由学科の定義づけと、それを学ぶ意義が概説される。自由学科とは、自由人にふさわしい学問であるとし、「徳と英知を実践あるいは希求することを通して学ばれるものであるとともに、それによって身体と精神が最高のものへと向うようになるのです。」(kallendorf2002:29)と述べ、さらに「人々は習慣的に名誉や栄光を求めるものですが、これらは、すぐれた人にとって最も重要な徳という見返りとなるものです。」と続けている。

そして、続く第4章では自由学科に含まれる様々な科目の学習目的や意義を具体的に論じている。冒頭で「人間についての研究や自由学科のうちで、徳を涵養し名誉をうるために学ぶべき重要な二つのものは学識と軍事です」(Ibid.37)として、「もし哲学者が支配するか、あるいは支配者がたまたま哲学者であるなら国家は幸いでしょう」とプラトンの言を引用し、学識を身につける重要性を強調しつつ、様々な例を引きながら、より具体的に学問の有効性を説明する。すなわち「知識の追求は人間精神に素晴らしい楽しみをもたらし、最も豊かな実りとなるのです。それ故に、懸念が全くない場合には、書物に向うのが一番良いことでしょう。書物には学ぶにふさわしいものや、立派に生きるためにふさわしい行為がすべて存在するからです。」(Ibid.43)とし、書物すなわち書かれたものは、時とともに薄れてゆく人間の記憶に比して記録として永続性があるゆえに重要であり、保存されるべきであるとする。ここで、ヴェルジェーリオは、過去のすぐれた書物を失ってしまった時代があったとして、ルネサンス時代からみて暗に中世を非難しつつ、過去の知識については、ギリシャ人の手になる書物に信頼を寄せつつ、当時ほとんど死語に近かったギリシャ語を「生き返らせようとしているのです。」(Ibid.47)と述べている。この言及から、おそらくヴェルジェーリオはパドヴァ時代にクリュソロラスからギリシャ語を学んだ可能性があるのではないと思われる。

そして、学ぶべき諸科目のうち、まず歴史学と道徳哲学の知識が、真に高貴な精神にとってよりふさわしいとする。「哲学以外の学科がリベラルと言われますが、それは自由人にふさわしいからですが、哲学は、それ自体の学習が人間を自由にする故に自由学科なのです。従って哲学から、人は何をなすべきで何をなすべきでないかという規則、すなわち正しい見方を学ぶのです。」(Ibid.49)そして、「歴史にはあらゆる時代の行為や言説が書かれている」ため、そのなかから道徳的例を学びとることができるとする。さらに、この二科目に加えて、「大衆の心を最も効果的に掴む技術」である雄弁術の学習を通じて洗練された話し方を会得することで、すぐれた話術と挙措の術を身につけたなら、「それは最もすぐれた人間、そして絶対的にすばらしい人格の刻印となるのです。」(Ibid.49)と説く。ここで強調されるのはすぐれた人間、特に統治者としての資質を涵養するための学問の重要性である。それに続けてやや唐突に、「ギリシャ人が自らの男の子に教えていたものに次の四つがあります：読み書き、レスリング、音楽、それに絵画で、絵画はスケッチという人もいます。」と、アリストテレスの『政治学』第8巻第3章の冒頭を引用したような書き出しで、絵画について、デザインの技術は鑑賞力を養うために必要だとギリシャ人が考えていたとして、絵画の実用的目的を説明しているが、これは必ずしも君主のための必須ではないことは明らかである(註18)。

「完全なる人間」を育むために

次に、文学、修辞学、詩学について、各々の科目は話し方の定型の習得と言語能力向上のために有効であるという意義について手短に触れた後、音楽については次のように言及される。

「確かに、音楽の技術は聴き手を喜ばせるものですが、かつてギリシャ人のあいだでは大いなる名誉を持つものでした。歌い方やリラの演奏法を知らなければ教養ある人とは認められませんでした。ソクラテス自身も年老いてからこうした技を習得しましたし、不道德な振る舞いを刺激するためではなく、理性の支配のもとで魂の運動が節度を保つようにするべく、貴族の若者たちにも習得するようにと言いつけていました。というのも、全ての声というわけではありませんが、調和した声だけが音楽的な心地良い響きを作るように、魂の運動すべてではなく、理性と調和した魂の運動のみが調和のとれた生に役立つのです。ところで、音楽の旋法は精神を和らげ情熱を静めるのに非常に効果的なので、音楽の知識は確かに自由な精神にとって価値があります。また、音の様々な性質や属性について、あるいは個々の音相互の比率に関する理論の原則も音楽の知識から得られます。ちなみに、協和音程や不協和音程は音の比率からうまれるのです。」

これは音楽に関するいくつかの見解が錯綜して混在したような記述になっている。まず最初は、音楽の実践的側面、つまり教養人の素養として演奏技術の重要性を強調しているが、途中から、演奏される音楽の精神への効果、すなわち精神が節度を保ち不道德な方向へ向わないようにするためという道徳的、エートス論的観点が加わっている。さらに付言すれば、調和ということばをキーワードとして、調和した音楽によってもたらされる生の調和、換言すれば人間における調和とは理性と魂の調和の証と捉える音楽観は、天体の調和により人間世界の調和がもたらされると考えるボエティウスの音楽観の反映とも言えよう。さらに、旋法、音の属性や比率に関する知識は学問としての音楽の領域であり、中世的音楽観の伝統をも見てとることができる。

次いで、算数、幾何に加えて「天体の動きや広がり扱う科目」として天文学もすぐれた学科として挙げている。「自然に関する知識は人間の知性にふさわしいものであり、この知識から、自然的存在の原理に加えて地球や天に存在する物の動きや変化の原因とその影響を理解するのです。」(Ibid.53) と自然に対する科学的態度を評価する言及は中世的世界観ではなく、まさにルネサンス的世界観を示唆するものである。そして、このような理解によって「庶民にとって奇跡とされている多くのことを説明することができるのです。」という表現は、すぐれた支配者と被支配階級との間に明確な境界を設けている姿勢の表れであり、統治者に向けられているというこの論文の目的がここで確認できる。

その他に、医学や法を扱う技術も各々自然科学や哲学から派生した学科として挙げているがこの二学科は実用であるため貴族には不適切だとしている。また、神学については「感覚から隔絶し唯一知性のみが到達しうる最も威厳ある原因や問題を扱う」学科と定義づけているがこれは形而上学と同義であろうと思われる。

最後に、こうした学科を学ぶ際の一般的な注意事項が述べられる。すなわち、学習者は各自自分の能力に見合った学科や学習法を選択せねばならない。言語能力や記憶力には個人差があ

石 田 陽 子

り、また性格にも違いがあるように学習能力には個人差があることを強調している。「およそ自由人の身体あるいは精神を、徳の行使や実践のために役立たずにするような仕事や技術や学習は卑しい職人向きのものとみなさなければならない。(中略) その種のものは精神から閑暇を奪い、劣悪なものにするからである。また、自由人にふさわしい諸々の知識でさえも、(中略) 精密さを求めて、あまりに打ち込むことは、いまのべた害を受けやすい。」(『政治学』1337b) とアリストテレスを引用して、ひとつのことにのめり込まないように、その意味での完全性の追求は避けるように戒めている点は、中庸の重要性を示唆するもので、ひとつの能力や学識だけが突出するのではなく、あらゆる面に調和のとれた人間であることを理想とする見解は非常にルネサンス的ではある。

第5章「身体の訓練と軍事研究」では、「真実を識別し理性の命ずるところを遂行できるような精神を育み、毅然として耐えぬくだけの身体を作り上げねばなりません。」と述べて身体と精神の両面の訓練を推奨している。また、なぜ戦うのかという理由については「暴力を加えるというよりは不正義を回避するべく備えるべきであり、戦力の行使が許されるとしても掠奪や強欲のためではなく命令と栄光のために戦うべきなのです。確かに、軍事訓練は君主にとってこの上なくふさわしいものです。というのも君主たちは軍隊を指揮するとともに、必要とあれば自らも戦うべきなのです。」と述べて、ホメロスの詩を好んだとされるアレクサンダー大王を例に「立派な王であり屈強な兵士」であるために、幼児の頃から身体を鍛え忍耐強い精神を育むべきだとし、また、実戦に役立つ運動として狩りや水泳を評価している (Ibid.68-69)。

次に第6章「余暇と気晴らし」では、人間は始終仕事をしつづけることはできないので、時には気晴らしに時間を費やすことも必要であるとして、余暇の種類やとり方を説明している。忍耐を養い身体を強くするのでなければ低級で有害な運動をさけることが最も重要であるとして、古代人の例を引き、海岸や岸辺で小石や貝殻を拾い集めること、球技や魚釣りあるいは狩りを、「大いなる喜びで精神を回復させるとともに、それに伴う身体運動によって四肢が強くなる」と推奨する。また、思春期の若者が勉強に疲れた時には、静かに休息をとるか乗馬や散歩をすること、また冗談を言い合うことを気晴らしとして挙げている。続けて、音楽については、「前に述べたように、歌唱やリラを奏でて精神をリラックスさせるのは品の悪いことではないでしょう。これはピュタゴラス派の人々の習慣でしたし、アキレスは戦いから引き揚げたとき、このように、確かに恋愛歌ではないでしょうが、強い人を讃えて歌うことで休息したとホメロスが言表したことこそは、かつて古代の英雄たちの間で賞賛されたことでした。私たちも余暇として、今の時代にふさわしい旋法を選択して同じように演奏したり、他の人の演奏を鑑賞することができます。シチリア旋法は、休息し、くつろぐのに最適ですが、フランス旋法は、逆に興奮し刺激となります。イタリア旋法は、その中間の手段になります。さらに加えて、歌唱あるいは打楽器による音楽は上品ですが、口笛を吹くのは紳士にはふさわしくありません。音楽にあわせて踊ることや女性たちと一緒に集団で踊るのも男性には賞賛に値しない楽しみに思われますが、有益な点もあります。つまり、もし若者をみだらで下品にしないのであれば、そして良き作法を台無しにしないのであれば、踊りは身体を鍛え四肢の機敏さを養えるからで

「完全なる人間」を育むために

す」(Ibid.84-87)と述べ、音楽が精神を和らげる効果を持つとして余暇としての有効性を認めている。

「苛酷な労働を穏やかに紛らわせる目的で、大いなる楽しみがなければならない。」(Ibid.85)とホラティウスのことばを引用し、余暇の重要性を積極的に認めるのは、おそらく「閑暇を過ごすことそれ自体は、快と幸福と至福な生を含むと考えられる。」(『政治学』1338a)とし、「善美に閑暇を過ごすことこそすべての出発点」であり、善美に閑暇を過ごすために「音楽を教育科目に入れた」(『政治学』1337b)とするアリストテレスに通ずるものがある。そして、精神を和らげるために「ふさわしい旋法を選択し」というのは、まさにギリシャ人が主張したエートス論そのものである。「今の時代の旋法」としてシチリア旋法、フランス旋法、イタリア旋法を挙げ、各々が精神に及ぼす影響の違いを説明しているが、旋法の名称こそ異なるがそれぞれギリシャ旋法に対応させることができる(註19)。

例えば、プラトンは「柔弱な調べや酒宴用の調べ」として「イオニア調やリュディア調のある種のものが『弛緩した』と呼ばれる」(『国家』398E)とし、ドリス調については「戦争をはじめすべての強制された仕事のうちにあって勇敢に働いている人、(中略)何らかの災難に陥りながら、毅然としてまた確固として運命に立ち向かう人、そういう人の声の調子や語勢を適切に真似るような調べ」であり、プリュギア調は「すべての状況において節度を守り端正に振舞って、その首尾に満足する人、そういう人を真似るような調べ」であるとする(『国家』399B-C)。また、アリストテレスは「たとえば混合リュディア調と呼ばれるものに対する反応はいっそう哀しげで重々しくなるが、他のもの、たとえばもっと穏やかな音階に対する反応は一層心のやさしいものになるし、また別のもの、たとえばドリス調だけがこの効果をもたらす音階であると思われるが、それに対する反応はとりわけ中庸で、落ち着いたものになる。これに対して、プリュギア調は靈感に満ちた効果をもたらす。」(『政治学』1340a-b)と言及している。ヴェルジェーリオが用いた旋法名がそれぞれギリシャ時代のどの調べに対応するかは断定しがたいが、論拠がエートス論に拠るのは明らかである。

また、踊りは時と場合によって有益にも有害にもなりうると捉えられているが、その有用性の根拠については、「踊りの一方は、ムウサの言葉を踊りによって模倣する人びとのもので、闊達さと自由人らしさを保持するものです。他方は、健康と身軽さと美しさを目差すものであり、手足や身体の他の部分の適当な屈伸を行なって、それらの諸部分に本来のリズミカルな動きを取り戻すのです。このような動きは、すべての踊りにふんだんに含まれており、それに伴っているのです。」(『法律』795E)というプラトンの言及にも通じるものがあり、ヴィットリーノが、舞踊家を教師として雇っていた理由も説明できるのではないだろうか。

「自由な精神にとって音楽の知識も必要」であり、音楽が比率の理論を学ぶうる学科であるとするヴェルジェーリオの捉え方は中世的音楽観を踏襲しているように思われるが、ギリシャ人の例をひいて音楽演奏の能力を持つべきであるとし、それは精神の調和にとって必要であるという主張や余暇に音楽を実践することを推奨していること、あるいは種々の旋法が精神に及ぼす影響に関する言表にはギリシャ時代のエートス論の影響も明確に見てとれる。

石 田 陽 子

そして最後の章「身体の手入れ」では、場と機会に適切な身なりの必要性を説いてこの論文は閉じられる。

ヴェルジェーリオの教育は教養ある君主や貴族を育てることを目的としているため、学問の最終目標は徳と名誉の獲得であると論文でも再三言及される。目標に到達するために、精神と身体をとともに鍛え、学識を身につけ、調和のとれた非のうちどころない人間にならねばならないが、音楽の知識や演奏能力もそのような人間に不可欠な属性のひとつと捉えられていたと言える。

むすび

ヴィットリーノとヴェルジェーリオの教育理念を検証したとき、いくつかの共通点を見出すことができる。

まず、支配者として理想の人間を作り上げることが教育の第一の目的とする点である。徳と英知を身につけた理想の人間を育てるには、学識を身につけ精神と肉体の調和がとれた成長を保証する教育を実践しなければならない。そのためには古典古代の文芸を最高の拠りどころとしつつ、身体訓練を重視するのも両者に共通の認識である。

音楽についてのヴィットリーノの肉声は届いてこないが、彼が雇っていた教師や所持していた蔵書から判断して、ヴェルジェーリオに通じるものがあったと思われる。つまり、知識としての音楽を必要な科目として自由学科に含めつつ、実践的側面も等閑に付してはいない。特に、音楽の実践は精神に調和をもたらし、正しく導くという道徳的視点から評価し、それ故に身につけるべき教養と受けとめている。余暇の必要性も含めて、若者（人間）の人格や生のすべての面に目配りした教育理念に通底するのはプラトンやアリストテレスの教育観でもあるが、人間がもつ属性のすべて、人間性や学識、教養、挙措振る舞い、外見、服装などが評価につながるというルネサンス的人間像の形成に及ぼした影響は少なからぬものがあっただろう。

「完全な人間」をめざすという人文主義的教育理念は、ルネサンスの理想である完全性の希求に呼応するものであり、完全性についての具体的かつ論理的根拠を提供したはずであり、音楽も理想の人間に作り上げるための必要条件として人文主義者は決して軽視していなかったと言えよう。

ルネサンス時代の音楽教育を考えるには、音楽についての多面的な視点が必要である。まず音楽の学問的側面と実践的側面を考慮すべきであり、また、教育の場として大学、教会、あるいは大学以外の学校、宮廷や家庭など様々な場での教育のありかたや教育観を包括的に捉えねばならない。しかし、ヴィットリーノの学校のような具体的な事例を丁寧にアプローチする作業の積み重ねから、ルネサンスの音楽教育の全体像を明らかにすることも不可能ではないだろう。

拙論はあくまでルネサンス期の音楽教育の諸相を包括的に捉えるための端緒にすぎないが、引き続いて、拙論で言及できなかったヴェルジェーリオ以外のルネサンス期の教育論の検証から進めていきたい。

「完全なる人間」を育むために

(註)

- (註1) 「人文主義」を意味する用語は国によって「umanism」「umanesimo」「humanism」と様々であるため、拙論では日本語の「人文主義」で統一する。
- (註2) 例えば、ガッフルリオ (Franchino Gaffurio 1451-1522) やグラレアーヌス (Henricus Glareanus 1488-1563) などである。なお、ルネサンスの音楽や音楽理論への人文主義の影響についての包括的研究としてPaliskaの『Humanism in Italian Renaissance Musical Thought』がある。
- (註3) この記録はヴィットリーノの生徒のひとりであったプレンディラクアの『Dialogo』に記載されているというが、拙論では (Fenlon 1980:13) に引用された『Dialogo』の一部を参照している。
- (註4) このボエティウスのことばは『新西洋音楽史(上)』(戸口他訳 1998) から引用している。
- (註5) ヴィットリーノの生涯や経歴に関する資料としては、彼の生徒にあたるフランチェスコ・プレンディラクア (Francesco Prendilaqua b.1422) の『Dialogo』、サッスオーロ・ダ・プラート (Sassuolo da Prato) の書簡集『De Victorini Feltrensis vita ac disciplina』、ヴィットリーノの後継者としてマントヴァの学校の責任者を務めた (1453年から3年間) バルトロメオ・サッキ (Bartolomeo Sacchi) の著作『Historia Urbis Mantuanae』、および、フィレンツェの出版業者ビステッチ (Vespasiano da Bisticci) の回顧やマントヴ侯妃パオラ・ゴンザーガ (Paola onzaga) 宛のヴィットリーノの書簡などがある。拙稿の記述は、これらの資料に基づいて Woodwardが著わした『Vittorino da Feltre and Other humanist Educators』の「Vittorino da Feltre」の章に多くを負っている。
- (註6) バドヴァ大学の教育方法論や教育科目については『ルネサンス百科事典』の「バドヴァ大学」の項あるいは (Woodward 1970)、(Carpenter 1972) などを参照している。
- (註7) 「magister puerorum」は「子どもたちの先生」の意で家庭教師のような身分をいう。
- (註8) 厳密に言えば、ジャンフランチェスコが侯爵位を授かるのは1433年のことであり、ヴィットリーノがマントヴァに学校を創設した時は、まだ爵位を持たない領主の身分である。
- (註9) この建物はイタリア語では「casino」と表記されており、本来の意味は「狩猟小屋」あるいは「集会所」に近い。
- (註10) (Gallico 1981:193) に「カーザ・ジョコーザ」の場所を示す地図が掲載されている。現在のドゥカーレ宮殿の見取り図とつき合わせると、学校として使用されていた建物は今日残っていないが、1395年にジャンフランチェスコの父フランチェスコ1世のために建てられたサン・ジョルジョ城の前に広がる草地 (Prato di castello) に面した建物であったと思われる。Pratoをはさんで、16世紀になって建てられたサンタ・バルバラ教会の向かい側になる。
- (註11) ヴィットリーノの蔵書に関しては、1425年にヴィットリーノが、当時ボローニャ大学でギリシャ語を教えていたアウリスパに書簡を送ったらしい。それを受け取ったアウリスパからヴィットリーノとも面識があったアンブロージョという人物に宛てた書簡に「ヴィットリーノというマントヴァ宮廷に仕えるギリシャ語について心得があると思われる人物からプラトンとプルタルコス著作の写

石 田 陽 子

しを求めている」旨の記述がある (Woodward 1970:68)。アンブロージョはフィレンツェの当時有名な収集家ニコロ・ディ・ニコリ (Niccolo di Niccoli) がヴィットリーノに紹介した人物で、彼がマントヴァにヴィットリーノを訪問した際に見せられた蔵書について、「約70巻の書物を見せてもらいましたが、その殆どは私が知っているものでした。また、キンティリアヌスについて話し合い、ヘロドトス、トゥキディデス、プルタルコス等の著作を見ました。私にとって新しいのは、ヘロドトスによる『ホメロスの生涯』でした。ヴィットリーノ殿はアウグスティヌスの『De Musica』や『Cathgoriae』を見せてくれました。また、ホラティウスの『Ode』についてのアクリウスの注釈も持っていました。彼は、プラトンの『法律』、『共和国』、『書簡』や聖アウグスティヌスの著作を届けてくれました。」と記している (Ibid:70)

その他、カエサル『Oratio』、アリストファネス、エウリピデス、アイスキュロス、ソフォクレスなどの劇作家を評価し、ヘシオドスも「実践の省察」として読まれていたとする言及もある (Ibid.50)。

(註12) マントヴァからヴェローナの方へ12マイル ほど生徒を連れていくこともあったと言う (Woodward 1970:66)。

(註13) *Vita Sancti Meinweri 1616* citata in A.Favaro, *Intorno alla vita ed alle opere di Prosdodimo de'Beldoomandi matematico padovano del secolo XV*
Johannes Gallico:『De ritu canendi nei vetustissiom et novo (「昔と今の歌う習慣について」の意)』

(註14) 手稿譜117 (ファエンツァ市立図書館所蔵)

(註15) この手稿譜には6曲のイタリア語の歌詞による3声の世俗曲が収められている。

Gallicoによれば、そのうち4曲はボナディエスの師であるホスビー (Johannes Hothby ?-1487) の作曲で、あとの2曲はエルフォルディア (Erfordia) の作曲とされる。曲のスタイルについての検証は今後の課題である。

(註16) 拙論では、Sotto版およびMiani版に基づき、Grendlerが英語による対訳を付したテキストを参照している。日本語訳は筆者自身による。

(註17) ヴェルジェーリオの生没年については諸説あり断定できないが、拙論ではGrendlerとKallendorfを参照している。

(註18) 「通常人びとが教えるのはだいたい4科目である。読み書き、体育、音楽、そして第四に場合によっては図画である。読み書きと図画を教えるのは、それらが生活のために有用で、いろいろ応用できるからである。」(アリストテレス『政治学』第8巻第3章1337b)

(註19) ヴェルジェーリオが記しているシチリア旋法、フランス旋法、イタリア旋法という名称の由来は不明である。原文では「modos」となっているので「旋法」と訳しておく。

「完全なる人間」を育むために

参考文献

- Carpenter, Nan C.: *Music in the Medieval and Renaissance Universities* Da Capo Press 1972
- FENLON, Iain: *Music and Patronage in Sixteenth-Century Mantua* 2vols.
Cambridge University Press 1980
- GALLICO, Claudio: *Musica Nella Ca'Giocosa*
a cura di GIANETTO, Nella: *Vittolino da Feltre e la sua scuola: Umanesimo, pedagogia, arti*
(p.189-198) L.S.Olschki Firenze 1981
- GROUT, Donald J. & PALISKA, Claude V.: *A History of Western Music* 5th ed.
Norton W.W. & Company 1996
- (戸口幸策他訳: 『新西洋音楽史 (上)』 音楽之友社 1998)
- GRENDLER, Paul F.: *Schooling in Renaissance Italy Literacy and Learning, 1300-1600*
The Johns Hopkins University Press 1989
- KING, Margaret L.: *Thwarted Ambitions: Six Learned Women of the Italian Renaissance*
Soundings p.280-304
- PALISKA, Claude V.: *Humanism in Italian Renaissance Musical Thought*
Yale University press 1985
- WOODWORD, William H.: *Vittorino da Feltre and Other Humanists Educators*
The Cambridge University Press 1897 2nd. printing 1970
- VERGERII, Petri Pauli: *Ad Ubertinum de Carraria de Ingeniis Moribus et Liberalibus*
Adulescentiae Studiis Liber (ca.1402-1403)
- (KALLENDORF, Craig W. ed. & trans.: *Humanist Educational Treatises* (p.2-91)
Harvard University Press 2002)
- BERGIN, Thomas G. & SPEAK, Jennifer ed.: *The Encyclopedia of the Renaissance*
Market House Books Ltd. 1987
- (別宮貞徳訳: 『ルネサンス百科事典』 原書房 1995)
- 牛田徳子訳: アリストテレス『政治学』(西洋古典叢書) 京都大学学術出版会 2001
- 田中美知太郎、藤沢令夫訳: プラトン『国家』(プラトン全集11) 岩波書店 1999
- 向坂寛、森進一他訳: プラトン『法律』(プラトン全集13) 岩波書店 1999